

全国証言会 # 2

開催日：2018年4月4日

開催場所：ピースボートセンターとうきょう

対象：一般参加者 27名（20代～50代ぐらいまで）

証言会の内容

- 被爆者濱住次郎さんと司会者の対談（10分）
- 被爆証言「私の被爆体験～おなかの中からみた原爆～」（40分）
- 質疑応答（15分）

4月4日に全国証言会の第2回目をピースボートセンターとうきょうにて実施しました。この証言会には中学生や20代、30代の若者を中心に、27名の参加がありました。今回の被爆証言をしてくださったのは濱住次郎さんです。濱住さんは原爆が落とされた当時はお母さんのおなかの中におり、直接の被爆はしていません。記憶がない中で生まれてから被爆者（＝胎内被爆者）であるということはどういうことなのか、どういう経験を今までされてきたのか話していただきました。

濱住さんに証言をしていただく前に、まずは導入として司会者と濱住さんとの対談を行いました。私たちは普段証言を聞くというついでに「被爆者」としてのみ証言者を見てしまいがちです。しかし、そうではなく被爆者としてこの場にいらしている濱住さんは被爆者以前に一人の人間であるのだということを知って欲しいという思いもあり、この対談を取り入れました。少しでも参加してくれた人たちに濱住さんとの接点を見いだしてもらおうと、学生時代はどのように過ごしたのか、ピースボートの印象は、などいくつか質問をし、濱住さんもまた参加者と同じような青年時代を過ごしてきたことを知ってもらい、また参加者のみなさんのお父さんやおじいさんと同じように年を重ねてきたのだということも分かってもらうよう試みました。

濱住さんは1946年生まれ。原爆が投下された当時はまだお母さんのおなかの中にいた、いわゆる「胎内被爆」です。ですのでご自身は原爆の記憶はありません。しかし、ご自身が、原爆で亡くなった父親の当時の年齢と同じ49歳になった時に、原爆について、また父親の死についてもっとしっかり知りたいと思い、きょうだいに手紙を出し、当時の様子を教えてもらったそうです。この過程で原爆の悲惨さを改めて知り、また、その後家族が乗り越えてくれた苦労があるから自分が生きることができたことに気が付き、それがきっかけとなり証言を始めました。「様々な人の想いがある自分はこのにいる。その人たちの想いを私が受け継いで伝えて行かなくてはいけない。父の倍以上生きなければいけない。それが私に託された使命だと思う。」と、濱住さんは語ってくださいました。

ご家族や知人、その他被爆者の会などを通して知った話をもとに、濱住さんはまずは72年前の8月6日に何があったのかをお話くださいました。濱住さんのお父さんは原爆投下地点から約500mのところ爆風に巻き込まれなくなりました。翌日帰ってこないお父さんを捜しにお兄さんとお姉さんが街へ行きましたが、見つかったのはベルトのバックルと溶けて固まった鍵の束、がま口財布の金属部分だけだったそうです。その後、濱住さんは原爆の長期にわたる健康被害、そしてそこから派生した社会的な影響などについても話してくれました。たとえば原爆小頭症。原爆小頭症は、妊娠初期の胎児が大量の放射線を浴びることで引き起こされます。原爆投下時に生まれていなかったにも関わらず原爆の健康被害を一生背負うことになった人がいたことを知りました。また、そのことによって自分の

ことを責め、傷つく母親が多いこともわかりました。その他にも、ABCC（原爆傷害調査委員会、のちの放射線影響研究所）が被爆者を対象に行った調査の話などもありました。なんと当時は胎内被爆を受けた子どもと受けていない子どもで学級を分けていた学校もあったそうです。当時定期的に被爆者を調査していたABCCに対しては、治療もせずに被爆者を研究材料にするなんてと怒る人たちも多かったそうです。「あの原爆でどれだけ多くの人が犠牲になったのか、どれだけ多くの人が後遺症で苦しんでいるのか、それを知った上で、まだ私たちを研究材料としてしかみていないのか。」との言葉がありましたが、原爆投下だけでは終わらなかった被爆者の苦悩を知ることができました。

濱住さんは会の最後に、「核の傘」の意味を今一度考えてほしいと投げかけました。核の傘に頼るということは、一体何を意味するのか。本当に核の傘があれば平和なのか。亡くなった人たちが伝えられなかった想いを私たちが引き継ぐということはどのような安全保障のビジョンを描くことなのかを考えなければいけないと問われているように思いました。



証言終了後多くの方から感想をいただきました。

- 核の恐ろしさを改めて知りました。（30代女性）
- 若い人たちが多く聞きに来ていたのが良かったと思います。（50代女性）
- 今回の話しを聞いて何かできることを1つずつ考えていきたいと思います。（20代男性）

司会の感想

濱住さんの証言からは「父をはじめ、当時亡くなった人たちから引き継いだこの命を私とその分まで生きる」という強い想いが伝わってきました。「想いを受け継ぎ繋ぐ」という部分はこれからを担う私たち世代にも通じるものがあると思います。今回の証言会では、自由研究の一つとして核兵器のことを調べた中学生がきてくれたり、「私ができることがあるのならしたい」と感想を述べてくれた人がいたりしました。まだまだ核兵器禁止条約について無関心な人が多いですが、少しずつですがしっかりと関心を持ってくださっている方が増えていると実感しました。この活動がもっと大きな波になるように続けていきたいです。

（おりづるピースガイド・橋本舞）